



写真-1 岩屋漁港から絵島を撮影（令和7年4月）

■ 岩屋港近くにある月見の名所「絵島」

写真-1 は、淡路島の船の玄関口、高速船のジェノバラインが発着する岩屋港の「岩屋ポートターミナル」前に浮かぶ奇岩の小島・絵島（えしま）を岩屋漁港から撮影したものです。背後に明石海峡大橋が見えています。

絵島は、月見の名所として『平家物語』に出てくるなど風光明媚な景勝地で、昭和 63（1988）年 3 月 25 日に県が郷土記念物※1 に指定しており、令和 4（2022）年 3 月 1 日には、兵庫県史跡名勝天然記念物に指定されています。

また、兵庫県版レッドリスト 2011（地形・地質・自然景観・生態系）において、A（規模的、質的にすぐれており貴重性の程度が最も高く、全国的価値に相当するもの）にランク付けされています。

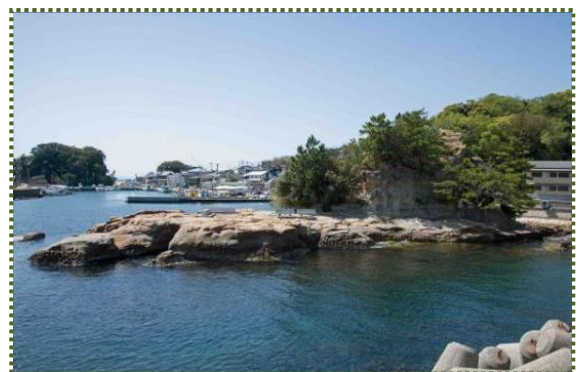


写真-2 岩屋ポートターミナル側から撮影した絵島（左端が大和島）

※1 郷土記念物：環境の保全と創造に関する条例第 112 条において、植物（自生地を含む。）及び地質鉱物（特異な自然の現象の生じている土地を含む。）で、地域の自然を象徴し、県民に親しまれ、又は由緒由来があり、特に保全することが必要なものと規定している。

■ 絵島は伊弉諾尊と伊弉冉尊の男女二神が創造した最初の島・オノゴロ島伝承地の一つ

神話の世界の話ではありますが、江戸中期の国学者・本居宣長は『古事記伝』において、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）と伊弉冉尊（いざなみのみこと）の男女二神が創造した最初の島・オノゴロ島を絵島に見立てています。

『古事記』の「国生み」神話では、以下のように記載されています。

二神が天の浮橋という空に浮かんだ橋に立って、天の沼矛(あめのぬぼこ)を海原に下ろしてかきまわし、引き上げた時、その矛からしたたり落ちた潮が積もり重なって島になりました。二神が最初に造ったこの島をオノゴロ島(淤能基呂島・自凝島)といいます。二神は天の高天原よりこの島に降り立ち、そこに天の御柱(あめのみはしら)と八尋殿^{※2}(やひろどの)を見立てて国生みを始めます。初めに生んだのが淡路島、次に生んだのが四国、三番目に生んだのが隠岐、そして九州、杵岐、対馬、佐渡を生み、ついに本州を生みました。この八つの島を大八島国(おおやしまくに)といいます。

このオノゴロ島伝承地は、絵島の外に友ヶ島の島々や南あわじ市の沼島(ぬしま)、自凝島(おのころじま)神社、博多湾に浮かぶ能古島(のこのしま)、島根県安来市の十神山(とかみやま)があります。

平安時代前期に書かれた『新撰亀相記』と鎌倉時代後期に成立した『新日本紀』では、オノゴロ島の説明に沼島を当てており、近世以降はこの沼島説が定説となっているそうです(沼島の由来は天の沼矛の「沼」か)。

※2 八尋殿：尋(ひろ)は長さの単位で、一尋は両腕を広げたときの長さ(6尺)を表わす。ただし、ここの八尋は具体的な長さを表わしているのではなく、数がとても大きいことを示す言葉である。八百万(やへよろず)、八千代(やちよ)などの八も同じ用法。つまり、八尋殿は「広大な殿舎」という意味である。

■ 平清盛も愛でた月見の名所？

淡路島観光のネット記事に、絵島は『平家物語』でも平清盛が月を愛でた場所として「月見」の巻にも登場するほど昔から月の名所でした、と紹介されていたので、どのように書かれているのかネットで『平家物語』を検索して読んでみました。『平家物語』巻第五「月見」の章で、該当する箇所は以下のとおりです(一部修正)。

「六月九日の日、新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。旧き都は荒れ行けど、今の都は繁昌す。浅ましかりつる夏も暮れて、秋にも既に成りにけり。秋も漸う半ばに成り行けば、福原の新都に坐(まし)しける人々、名所の月を見んとて、或いは源氏の大將の昔の跡を偲びつつ、須磨より明石の浦伝ひ、淡路の灘(せと)を押渡り、絵島が磯の月を見る。或いは白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂、尾上の月の曙を、詠(なが)めて帰る人も有り。旧都に残る人々は、伏見広沢の月を見る。」

上記は平清盛が福原遷都を行った時の話で、時は治承4(1180)年です。

6月9日、新都の工事を始め、8月10日に上棟式、11月13日には安徳天皇が福原にお遷(うつ)りになると遷都の日程が決まったことが記されています。

月見に関しては、「秋も半ばになると、福原新都にいる人々は、名所の月を見ようということで、光源氏の昔の跡を偲びつつ、須磨より明石の浦づたいに淡路の瀬戸を渡って、絵島が磯の月を見る。あるいは白良・吹上・和歌の浦・住吉・難波・高砂・尾上の月のあけぼのをながめて帰る人もある。」と記されています。



図-1 絵島周辺の地図

つまり、絵島は月の名所として有名で、新しくできた福原の都の人々は明石から海峡を渡って「絵島が磯の月」を觀賞したとありますが、「清盛が月を愛でた場所」との記載はありません。

なお、絵島の頂上には小さな鳥居が建っていて、その向うに宝篋印塔^{※3}（ほうきょういんとう）が見えます（写真-3）。これは、清盛が大輪田の泊を修築した時に人柱にされようとした人たちを助けるため、自らが人柱になった清盛のそば仕えの少年・松王丸の墓といわれています。

※3 宝篋印塔：墓塔・供養塔などに使われる仏塔の一種。宝篋印塔を「右旋礼拝」とすると加持があるとされるが、絵島の頂上のそれは、礼拝以前に頂上に登るのが大変！



写真-3 絵島の頂上に見える鳥居と宝篋印塔

■ 絵島の浦にて和歌を詠んだ西行法師

絵島に架けられた橋の入り口の右手に、『新古今集』で有名な歌人・西行法師^{※3}の歌碑とその案内板があります（写真-4）。

千鳥なく 絵島の浦にすむ月を

波にうつして見るこよひかな

（山家集：千鳥の鳴いている絵島の浦の澄んだ月を、波に映して見ている。今夜の絵島は何と美しいことであろうか。）



写真-4 西行法師の歌碑（右）と説明板

※3 西行法師：元永元（1118）年～建久元（1190）年。平安時代末期の武士であり、僧侶、歌人。西行は号であり僧名は円位。保延元（1135）年に左兵衛尉に任ぜられ、さらに鳥羽院に北面武士としても奉仕していた。保延6（1140）年10月、出家して西行法師と号した。出家後は東山・嵯峨・鞍馬など諸所に草庵を営んだ。30歳頃、陸奥に最初の長旅に出る。その後、久安5（1149）年前後に高野山に入った。仁安3（1168）年には崇徳院の白峯陵を訪ねるため、弘法大師の遺跡巡礼も兼ねて四国へ旅した（仁安2年とする説もある）。その後高野山に戻り、福原遷都のあった治承4（1180）年頃に伊勢国に移る。文治2（1186）年、東大寺再建の勧進のため2度目の陸奥行きを行い藤原秀衡と面会。この途次に鎌倉で源頼朝に面会し、歌道や武道の話をしたことが『吾妻鏡』に記されている。伊勢国に数年住んだ後、河内国石川郡弘川（現・大阪府南河内郡河南町弘川）にある弘川寺に庵居し、建久元（1190）年2月16日にこの地で入寂した。享年73。かつて「願はくは花の下にて春死なん その如月の望月のころ」と詠んだ願いに違（たが）わなかった。如月は旧暦の2月のこと。

■ 地質学的にも貴重な絵島

絵島は地質学的にも貴重であることから、兵庫県版レッドリスト2011（地形・地質・自然景観・生態系）のAランク（規模的・質的に優れており貴重性の程度が最も高く、全国的価値に相当するもの）に選定されています。

絵島では、淡路島北部に分布する新生代古第三紀の神戸層群下部の岩屋累層が観察できます。上部は海成泥岩・砂岩、中部は砂岩・礫岩、下部は泥岩・角礫岩となっています。3千万年以上前の砂岩層が露出していて地質学的にも珍しい地層のようで、「褐鉄鉱沈殿砂岩層」といって、風化により地層中の鉄分が割れ目（節理）に沿って作り出した縞模様が美しく、県の郷土記念物に指定されています（写真-5）。

神戸層群の年代は、長い間およそ1,600万年前から1,500万年前であると考えられてきましたが、平成8（1996）年、通商産業省工業技術院地質調査所の研究結果により、淡路島北部に分布する岩屋累層のみが中期中新世のおよそ1,600万年前か

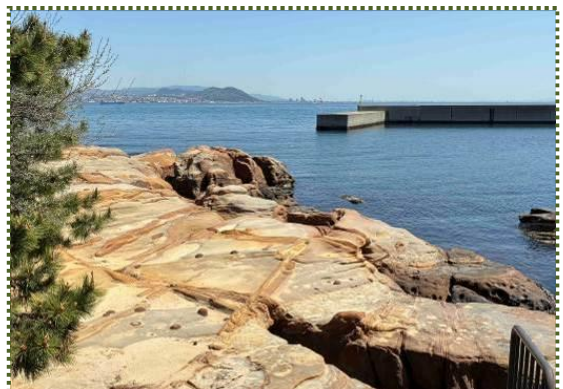


写真-5 絵島の露出した「褐鉄鉱沈殿砂岩層」の縞模様

ら 1,500 万年前で、神戸市西部から三田市付近の神戸層群は約 3,700 万年前から 3,100 万年前（後期始新世から前期漸新世）の地層であるとされました。

ところが、平成 12（2000）年に大阪市立大学の山本裕雄・石油資源開発株式会社の栗田裕司・兵庫県立人と自然の博物館の松原尚志の 3 名による共同研究から、岩屋累層の年代がさらに古く 3,800 万年前から 3,500 万年前（中期始新世末から後期始新世）であることが判明しました（日本地質学会の学会誌「地質学雑誌」第 103 巻第 5 号）。

これは、北淡町（現・淡路市）野島常磐北方の岩屋累層で採集された植物プランクトン化石の試料分析において、時代決定に有意義な石灰質ナノ化石と渦鞭毛藻化石がそれぞれ 3 種発見され、それらの生息年代から明らかになったものです。



写真-6 西側から撮影した絵島

なお、絵島には橋が架かっていて以前は上陸することができましたが、現在は「褐鉄鉱沈殿砂岩層」を保護するため、橋を渡った先は立ち入り禁止にしているそうです。

■ モノローグ

絵島の南約 250m の所にある大和島（やまとじま）も、絵島と同じ岩屋累層で砂岩層が露出していますが、こちらは同じ郷土記念物（昭和 47 年 9 月 1 日指定）でも保全対象は島に生えている「イブキ、ウバメガシ、クロマツ群落」です。

また、大和島といいながら陸続きなので島ではなく、西行も絵島の浦の月は詠んでいますが大和島は詠んでいません。ただ、岩屋ポートターミナル前のパネルには、いにしへの歌人 5 人（西行、柿本人麻呂、藤原定家、源兼昌、寂蓮法師）の歌が紹介されていて、その一つに歌聖・柿本人麻呂が大和島を詠んだ（？）歌があります。



写真-7 大和島

天離る 夷の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和島見ゆ

（あまざかる ひなのながぢゆ こいくれば あかしのとより やまとしまみゆ）

この歌は、大和島近くに立てられた「淡路和歌の路」パネルにも紹介されていて、「人麻呂は、明石の高地に居を定め、海峡より朝夕この島を眺めることを唯一の楽しみとしていた。」と記されていますが、読み進めていくと大和島とはまったく関係のない歌のようです。



図-2 絵島周辺の地質図

図-2 地質図の記号の説明

RI 埋立地	AI 沖積層
Ol 大阪層群下部亜層群	KI 神戸層群下部累層
Gr 六甲花崗岩	Gp 花崗斑岩

「明石の門(と)」とは明石海峡のことで、大和島は「海上から望んだ大和の山々」を指し、都を恋しく思いながら筑紫(九州)から長い航路をやってくると、明石海峡から遙か東方に懐かしい大和の山々が見える、という意味です。紛らわしいですね！

オオデマリ

レンブクソウ科ガマズミ属の落葉広葉樹で、樹高は2～6mほどになる。別名テマリバナ。日本原産のヤブデマリの園芸品種といわれるが、学名上はこちらが基本種扱いで、原種のヤブデマリは変種扱い。原種は花序の周辺にだけ装飾花をつけるものだが、品種改良によって花序の花すべてが装飾花となったものである。花期は4～5月頃で、アジサイのような白い装飾花を多数咲かせる。絵島近くのステーキハウスの店先に咲いていた。



写真-8 オオデマリ

【参考資料】

- 1 『淡路町誌』 淡路町誌編集委員会編 平成17年3月
- 2 『名所めぐり～淡路往還：絵島』 兵庫県立歴史博物館
https://rekihakuhaku.pref.hyogo.lg.jp/digital_museum/trip/road_awaji/ejima/
- 3 『イザナギとイザナミ』 古事記・現代語訳と注釈～日本神話、神社、古代史、古語 HP
https://kojiki.js-ray.com/1_2_2_nishin_no_kekkon.html
- 4 『国立国会図書館デジタルコレクション～平家物語 巻第五』 永井一孝 校 大正11年
<https://dl.ndl.go.jp/pid/964450/1/135>
- 5 『岩屋港近くにある「絵島」は平清盛ゆかりのパワースポット(淡路島の観光スポット)』 淡路島観光ナビ
<https://awajikanko.com/eshima/>
- 6 『地学巡検ガイド～淡路島』 令和元年8月
<http://1604-016.a.hiroshima-u.ac.jp/chiken/guide/wiki.cgi?page=20190803>
- 7 『絵島は現在も立ち入り禁止で入れない？無料駐車場と観光スポットについて』
<https://splendidwindow.com/eshimatatiirikinsi/>
- 8 『万葉百科～歌詳細』 奈良県立万葉文化館 HP
https://manyo-hyakka.pref.nara.jp/db/detailLink?cls=db_manyo&pkey=255
- 9 『宝篋印塔、福原京、絵島(淡路市)、オノゴロ島、西行、山家集、神戸層群、オオデマリ』 フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

※発行：令和8(2026)年1月 『ひょうご水百景』No.224

改訂：令和8(2026)年8月 『ひょうご水百景』No.224